

# 江戸の園芸書から

水谷 泰弘

## 0 . はじめに

中尾佐助はその著書『花と木の文化史』<sup>1)</sup>の中に「花はなぜ美しいのか」という1章をもうけ、本能的美意識と文化的美意識とに分けて考える。本能的美意識と文化的美意識については次のように述べる。

チューリップやバラの花は、子供でもその美しさがよくわかる。これは人間の本能的美意識から理解容易だからということの説明できよう... 西洋文化の花の美学はだいたい本能的美意識にそってできあがっている。しかしこうしたありふれた西洋花にだんだん不満を感じる日本人も現れてきているようだ。それは花の美を本能的美学だけでなく、学習による文化的美学によって求めるようになったからである。

しかし花に対して本能的美意識を人間が持っているということは、にわかには信じがたい人も多いことだろう。中井正一はその『美学入門』<sup>2)</sup>で、自然がなぜ美しいのであろう、と自問して次のように述べ、自然の美しさの美学的定義の難しさを語っている。

この問題はまだ解けきれていない。実に数千年の間、人々はこの難しい問題の前にわからぬままに頭をたれているのである。しかし、いろいろの疑問を投げかけている、この疑問の数々が、美学の問題にほかならないともいえるのである。

いずれにせよ花や木を美しいと考える人がいることは事実であろう。ここではとりあえず花は美しいということを前提として、その美しさに淫し、そこに

遊んだ江戸前期の植木屋伊藤父子とその著作を紹介し、とくに子政武のいわゆる「楓集」に引用された和歌を取上げてみたい。

## 1. 染井の伊藤父子

桜の名前「染井吉野」で知られる染井は、現在の東京都豊島区駒込である。『新編武蔵風土記稿』<sup>3)</sup>には芸家伊兵衛の項に「先祖伊藤伊兵衛此処に住し、萬治元年三月二十八日死す」とある。萬治元年は1658年であるから、伊藤家が17世紀の早い時期にここ豊島郡岩淵領染井に居を構えたと思われる。伊藤伊兵衛は代々襲名された名前であり、その三代目が伊藤伊兵衛三之丞、四代目が伊藤伊兵衛政武と考えられている。享保4年(1719)の自序がある辻雪洞著『東都紀行』<sup>4)</sup>には次のように書かれている。

杜鵑花(サツキ)今さかりの家有、是なん躑躅(ツツジ)や猪兵衛とて、江北の木商なり、其初めは、藤堂大学頭高久の露除(つゆよけ)の男成しに、大学頭、草花の類当座に移し持たせ、花過れば悉くぬき捨させけるをば、此伊兵衛植ためけるより、次第次第に、きり島つゝじ、百椿、牡、芍、さしぬ花の木、百竹、百楓、百梅、百桜などゝ、すけばあつまる所成べし。

つまり自らを「きり嶋屋伊兵衛」と称した父三之丞は、籐堂家下屋敷の庭掃除などをする「露除(つゆよけ)」、つまり下男のような存在であり、下屋敷で不要になった「きり島つゝじ」など、多くの花木を自らの庭に移植し、多くの花や樹木を所有するに至ったという。籐堂家が下屋敷のために染井に替地を与えられたのが明暦4年(1658)である。農文協版『花壇地錦抄』<sup>5)</sup>の解説者君塚仁彦は三之丞の没年を享保4年(1719)と考えており、八坂書房版『地錦抄附録』の解説者北村四郎は政武の生没年を1676-1757としている。いずれにしろこの植木屋は父子一体となって経営されたものと思われる。

我々のテーマに関して少し歴史を振り返ってみると、初め3代の将軍、家康、秀忠、家光は花好きであったといわれ、特に秀忠は「花癖あり」というほどの花好きであった。

また寛永12年(1635)に武家諸法度の改正によって制度化された諸大名の参勤交代は、結果的に全国各地から様々な花卉や草木を江戸にもたらすことになった。交通と流通の発達があり、富と物が権力のもとに集まっていった。また

明暦の大火（いわゆる振袖火事、1657年）は江戸城本丸、天守閣をはじめ江戸の大半を焼き尽くした。その後幕府は諸大名の藩邸を上・中・下に分け、上屋敷を丸の内など中心部に、中屋敷を江戸城外郭付近に、下屋敷を近郊に配置した。大規模藩邸には広大な庭園が営まれることが多かったので、庭木類の需要は増大したのである。

## 2. 伊藤父子の著作

時代が安定と繁栄に、政治は文治政治に向かい、庭木の需要も増えていく中で、伊藤伊兵衛父子は多くの園芸書を残した。

文献表 A がそれである。1) と 2) が父三之丞の作で、3) は三之丞の写図に政武が注を加えたもの、4) から 11) まだが子政武の作である。ただし 5) は父親の著書に画をいれ、加筆したものだから、父子共著ともいえる。2) から 9) までは活字化されて文献表 B に収録されている。

父子の著作を一覧すると、父は自分の最も得意とするツツジ、サツキに関して一書『錦繡枕』を纏め、さらに全体的なものとして『花壇地錦抄』をあらわした。これは 6 巻 5 冊におよび、ボタン 481 品を始めとして、シャクヤク 104 品、ツバキ 206 品、ツツジ 196 品、サツキ 163 品、キク 231 品、ウメ 48 品、サクラ 46 品、カエデ 23 品など幅広い種類の花弁、草木を取り扱った総合園芸書である。この中には前著『錦繡枕』の説明を簡略化したものも含まれ、つぎの著『草花前集』は父の写図に政武が注し、開版したものである。

子政武は父の『花壇地錦抄』をより完成したものにすべく、『増補地錦抄』『公益地錦抄』『地錦抄附録』を刊行したが、これらには政武自身の描いた植物図が多数収録されている点で父のもと異なる。また自分の最も好むカエデに関して、これまで手稿本の形で保持されてきた『歌僊楓集』『新歌僊楓集』『追加楓集』をいわゆる地錦抄三部作のそれぞれの一巻として収載している。この 3 編の手稿本楓集はそれぞれ 36 品、36 品、28 品のカエデの葉を彩色で原寸大に写し、特徴と品種名、由来和歌を付したものである。地錦抄三部作に収載された時の版木を用いて、後に 100 種類の楓集にしたのが『歌仙百色紅葉集』である。

しかし園芸書あるいは図鑑の本文中に和歌を挿入することは、つまり地錦抄三部作のそれぞれに和歌つきの楓集を挿入することは、現代風に考えると逸脱と言ってもいいのではないだろうか。政武の楓への思い入れの強さと、版本として残しておきたい気持ちがそうさせたのであろうが、あえてこの部分に注目

して、江戸前期の、それも学者でない人の古典受容の一例を見てみたい。

### 3. 「もみぢつくし」ほか

使用したテキストはいずれも八坂書房版のものである。(文献表 B)

「もみぢつくし」(歌僊楓集)が収録されている『増補地錦抄』は京都園芸倶楽部(財団法人)が戦前に発行したものの復刻版として刊行(1983)された。底本はいわゆる江戸仮名と漢字交じりの版本であるが、それを活字にしたものである。「後出歌仙もみち集」(新歌僊楓集)を収録する『公益地錦抄』の場合も同様である。「楓二十八」(追加楓集)は『地錦抄附録』に収録されているが、これは1983年に活字化され出版されたもので漢字が新字体にされているなど、読みやすくなっている。

「もみぢつくし」には次の前書きがある。

楓(かいて)ハ種(あき)の紅葉を第一(おおい)といへ共今来古往(こんらいこおう)春の出葉(では)にさま／＼の色ありて秋は猶色を染るのながめ有葉形に大小あり切込すかし葉あり丸葉有長短の品々あれバわづかに一葉宛圖にあらわし集改(しゅうかい)して見侍れば三十六種に及數のおかしとて名の下に古歌を引歌して歌仙楓(かいで)號(なずく)。(／＼は反復記号)。(なお古歌の語はここに出てくるのみであるが、以下主としてこの語を使う)

続いて、36歌仙にちなんで(あるいは連句の歌仙形式にちなんで)36のカエデの品種名が挙げられ、それぞれの形態や色、特徴などが簡潔に書かれ、相応しい古歌が引用されている。縮小されいくつか纏められてはいるが、各品種一葉の図が付されている。この続編の「後出歌仙もみち集」(新歌僊楓集)でも36品種のカエデについて同様の形式をとっている。「楓二十八」(追加楓集)では28品種のカエデ名が挙げられ、簡潔な説明と古歌(ただし品種名「唐楓」には和歌は付されていない)については同様であるが、図は各品種毎に一葉ずつ付されている。合計100種のカエデの品種名が挙げられていることになる。カエデに打ち込んだ、あるいはのめりこんだ政武であるが、そこには「物づくし」的伝統の精神を見ることもできよう。すでに安楽庵策伝(『醒醉笑』作者)の『百椿集』があり、やがて伊藤若沖の「百犬図」も描かれる。

ところで父三之丞の『花壇地錦抄』巻3、夏木の分の中で、「楓(かえで)の

るひ」の項目に 23 の品種名が挙げられているが、これと重複するのが 6 品種ある（高尾、八染、青葉、業平、九重、立田、通天）。このことは「もみぢつくし」36 品種名はすべてを政武が命名したわけではないことを意味する。少なくとも 6 種は当時すでに通行していた名前か、父親の名づけたものを利用している。なかんずく「青葉」では『花壇地錦抄』での説明に使われている和歌も利用しているので、この 6 品種中 5 品種に関しては、品種名は変えずに父とは別の説明と和歌を付け加えたことになる。残り 30 品種については、政武の命名であると断言はできないが、品種名そのもの、あるいはそれに近いものが、引用歌に含まれるものが多いので、おおくは政武の命名であると推測する。

なお技術的には、中尾佐助によれば<sup>6)</sup>、

日本のカエデの栽培品種は珍しくも多くの異なった種（スピーシス）からとりだされている。ハウチワカエデ、コハウチワカエデ、ヒナウチワカエデ、[中略]、イタヤカエデ、モミジなどから約 200 種がとりだされている。そのほとんどは枝変わりから選択されており、交配はない。

とのことである。またメンデル (1822-1884) の法則が世にでたのは 1865 年のことである。

#### 4. 「もみぢつくし」ほかの古歌

先に述べたように、ただ 1 種「唐楓」には和歌が添えられていない。これは将軍拝領の品ということで、遠慮したのであろう。それを除く 99 首の和歌を資料 I、II、III に分け、出典等を示すことにした。いずれも便宜上カエデの品種名に番号を付し、次のような事項等を列挙した。

カエデの品種名、古歌の作者と古歌（ただし 1 行書き）。\*印の後に、出典と作者名と若干のコメント。ただし資料 I では典拠となった和歌も挙げた。

古典和歌の場合、誤記や誤写があるのは避けられないことであろうが、「もみぢつくし」36 首においても、次のようないくつかが目立つ。（元歌を先にあげる）

- 3) の歌   あかなくに→あやにくに
- 8) の歌   ちらむ梢ぞ→ちらぬ紅葉は
- 14) の歌   かつちる→なりけり

- 21) の歌　みだれむと思→ミだれ染にし  
 33) の歌　しくらし→しぬらし  
 36) の歌　色づきに→紅葉しに

21) の歌では、古今和歌集と小倉百人一首とでは違いがあり、政武は百人一首のほうを取っている。この他にも誤写や誤記と思われるものがいくつかあるが、それらがどの段階で起きたかは判別しがたい。

作者に関しても同様のことが言える。14) の「をきよし」は「せきお」の誤写であろう。17) の猿丸大夫は百人一首にならったものであろう。27) は新日本古典文学大系『新古今和歌集』527 の歌だが、藤原輔尹となっているのは次の528 の歌の作者を誤記したものであろう。大部分の歌と違って、作者・歌の順序が逆であることも、そのことを裏付けているだろう。いずれにしろこの作者は皇太后宮大夫俊成であろう。29) の歌は『源氏物語』に出てくるもので、その作者が友則というのは全くの誤記であろう。

14)、27)、29) の作者名を含め、いずれも誤写の範囲内と考え、出典別に列記すると次のようになる。

|        |      |
|--------|------|
| 古今和歌集  | 21 首 |
| 新古今和歌集 | 3 首  |
| 千載和歌集  | 3 首  |
| 古今和歌六帖 | 2 首  |

続後撰和歌集、夫木和歌抄、続拾遺和歌集、後拾遺和歌集、玉葉和歌集、北国紀行、源氏物語、各 1 首

一目瞭然で『古今和歌集』からの引用が圧倒的に多く、当然のこと秋歌の部からの引用が大部分である。ここに政武の王朝文化への憧れをみることもできようし、また父三之丞と共に知識人との交際も多くなっていったであろう政武の基本的素養の一端を見ることもできよう。

『日本古典籍書誌学辞典』<sup>7)</sup>によると『古今和歌集』の版本は江戸初期から元禄3年、すなわち「もみぢつくし」の原本である『歌僊楓集』作製のおそらく前に、10種類出ている。そのほかに正保版『二十一代集』もある。(小本『二十一代集』は刊行年不明)『古今和歌集』はかなりの人気、あるいは需要があったと言えるのではないだろうか。政武にとっても和歌といえば、まず『古今和歌集』が念頭に浮かんだに違いない。

この続編である「後出歌仙もみち集」では、同様にかかなりの誤写、誤記を許容した上でのことだが、その出典は次の通りである。

題林愚抄 9 首

新古今和歌集 6 首

新拾遺和歌集 4 首

藤葉和歌集 3 首

続後撰和歌集 2 首

続千載和歌集、新後拾遺和歌集、千載和歌集、拾遺愚草、続拾遺和歌集、

続古今和歌集、新千載和歌集、拾玉集、古今和歌集、金葉和歌集、

玉葉和歌集、夫木和歌集、各 1 首

ここではむしろ出典の多様さに驚かされる。

さらにその続編である「楓二十八」では、その出典は次の通りである。

新題林和歌集 20 首（宮廷歌会でつくられたものを、地下歌人が編集したもの）

新後明題和歌集 2 首

新千載和歌集、亀山殿七百首、後水尾院集、新古今和歌集、題林愚抄、

各 1 首

先に述べたように、「唐楓」には和歌が付されていないので、27 首中 23 首が、慶長以後の歌で、ほとんど同時代の和歌といっても良いほどである。

## 5 . 終わりに

江戸初頭より元禄までの約百年間のわが国は大変な高度成長期で、日本の人口はその間約 3 倍に膨張した。それは人々を養うための耕地の開発が急速に進んだことによる。しかしこのような形での耕地の増加と、それを足場にした生産力もやがて頂点に達し、元禄期を境に変動の少ない状態に移って行った。

染井の植木屋伊藤父子が著作を刊行したのは、この元禄時代以降である。すでに述べたように参勤交代制度の確立に伴う江戸と地方諸藩との文物の交流、明暦の大火後の江戸の町の大改造もまた彼らに利したと思われる。江戸の町の人口も享保 6 年 (1721) にはほぼ 100 万になったと推定されている。ちょうど享保の改革が本格化する頃である。

元禄時代に言及して尾藤正英氏は次のように述べている<sup>8)</sup>。

16世紀に形成された新しい近世の社会は、17世紀を通じて順調な発展の歩みをつけ、その社会組織に即した生活意識も、ようやく成熟の段階に到達しようとしていた。発展には限界があり、社会的な矛盾も顕在化しつつあったが、危機の時代というには、まだ遠い。この歴史的な段階において、人々が求めたものは、その成熟した生活意識に自覚の光をあて、自己が生きていることの意義を認識すること、すなわち現代風にいえば自己確認（アイデンティティ）であったのではあるまいか。

まさにこの時代精神を、伊藤伊兵衛父子は自分のものとしてきたであろう。

政武自身はあくまでも堂上歌人の歌にこだわったが、彼が生まれる10数年前の寛文5年(1665)には、すでに戸田茂睡が古今伝授に代表される中世歌学の権威に反対を表明している。翌寛文6年には下河辺長流は地下歌人の歌集『林葉累塵集』の編集に着手した。和歌が再び庶民のものになって行く空気を、政武も感じていたに違いない。ことに政武は「唐楓」に関して将軍吉宗の下問を受けその一枝を拝領したというエピソードからも<sup>9)</sup>、その幕府との近さの感覚故に、ほとんど同時代の宮廷歌人の歌を引用することを憚らなかつたであろう。武陽染井野人と自称した父三之丞、武陽染井の野夫と自称した子の政武とも、その謙称とはうらはらに、満々たる自負の心をこめていたであろう。

## 注

- 1) 中尾佐助『花と木の文化史』岩波書店、1987
- 2) 中井正一『美学入門』朝日新聞社、1996
- 3) 蘆田伊人編『大日本地誌大系・新編武蔵風土記稿』巻之十九、雄山閣、1929-33
- 4) 辻雪洞「東都紀行」、森銑三、野間光辰、朝倉治彦監修『新燕石十種』第三巻、中央公論社、1980-82
- 5) 伊藤伊兵衛『花壇地錦抄』、日本農書全集第五十四巻、農山漁村文化協会、1995
- 6) 中尾佐助、前掲書
- 7) 井上宗雄他編『日本古典籍書誌学事典』岩波書店、1999
- 8) 週刊朝日百科『日本歴史 70』朝日新聞社、1987
- 9) 前掲書『新編武蔵風土記稿』



## 文献表 A

- 1) 1692 (元禄 5) 『錦繡枕』きり嶋屋伊兵衛 (ツツジ 173、サツキ 161、花形の基準を設け記載、培養法等を付す) 後に『長生花林抄』と改題。
- 2) 1695 (元禄 8) 『花壇地錦抄』三之丞 (花卉 394 品につき、体験を通して性状と培養法を記述)
- 3) 1699 (元禄 12) 『草花絵前集』伊藤伊兵衛 (タモトユリ、ハンカイソウ、タカラコウなど草花 119 品の精写図を収載)
- 4) 元禄年間 『歌僊楓集』東武染井野卑 (カエデ 36 品の葉を彩色で原寸大に写し、特徴と品種名、由来古歌付記) (手稿本)
- 5) 1710 (宝永 7) 『増補地錦抄』伊兵衛 (政武) (亡父三之丞の遺書に自画を入れた増補本)
- 6) 宝永年間 『新歌僊楓集』武江染井鄙夫 (カエデ 36 品の葉を彩色で原寸大に写し、品種と由来古歌を付記) (手稿本)
- 7) 1719 (享保 4) 『広益地錦抄』伊兵衛 (政武) (増補地錦抄に漏れた花卉と薬草を収載)
- 8) 1732 (享保 17) 『追加楓集』東武染井卑子 (カエデ 28 品の葉を原寸大に写し、品種と由来古歌を付記) (手稿本)
- 9) 1733 (享保 18) 『地錦抄附録』伊兵衛 (政武) (増補地錦抄、広益地錦抄に漏れた花卉と薬草を収載)
- 10) 1737 (元文 2) 『歌仙百色紅葉集』楓葉軒樹久 (政武) (既刊の自著、地錦抄三部作に用いた百色楓の版木による改編本)
- 11) 1737 (元文 4) 『本草花蒔絵』樹久 (政武) (物故数年前の政武が既刊の自著を改編して刊行に備えた版下本)

以上、青木宏一郎『江戸の園芸』ちくま新書から引用。

岩佐亮二「江戸時代の古文書に見る園芸の展開(1)(2)」千葉大学園芸学部・花葉会『花葉』4, 5号、参照。

## 文献表 B

- 1) 伊藤伊兵衛三之丞、伊藤伊兵衛政武『花壇地錦抄・増補地錦抄』八坂書房、1983；「増補地錦抄・巻之四：もみぢつくし」(=A の 4)
- 2) 伊藤伊兵衛政武『広益地錦抄』八坂書房、1983；「後出歌仙もみぢ集 (記載は無い)

- が、卷之三に当たる)」(=A の 6)
- 3) 伊藤伊兵衛政武『地錦抄附録』八坂書房、1983 ; 「卷之四 楓二十八」(=A の 8)  
(上記 A の 4,6,8 を合わせたものが『歌仙百色紅葉集』に当たる)
- 4) 伊藤伊兵衛『花壇地錦抄』(日本農書全集 54) 農山漁村文化協会、1995
- 5) 三之丞伊藤伊兵衛、伊藤伊兵衛『花壇地錦抄・草花絵前集』(東洋文庫 288) 平凡社、1995

## 資料

### 注記

- 1) 大観=新編国歌大観 角川書店 (ローマ数字は巻数)
- 2) 新大系=新日本古典文学大系 岩波書店 (数字は、当該の歌集の歌の番号で、これは大観の当該歌集の歌の番号と原則一致する)
- 3) 集成=近世和歌撰集集成 明治書院 (ローマ数字は巻数)
- 4) /＼は反復記号
- 5) 紙幅の関係で古歌は 1 行書きとし、作者名等も品種名の後に挙げた。
- 6) 大観と新大系の両者にある和歌は、新大系に従った。
- 7) 品種名のふり仮名はかっこ内に示し、古歌のふり仮名は省略した。

### 資料 I

#### もみぢつくし (歌僊楓)

##### 1) 小倉山

定家卿

おくら山しくるゝころの朝な／＼ きのはうすき四方のもみぢ葉

\*続後撰和歌集 (大観 I -p.296) 前中納言定家

をぐらやましぐるるころのあさなあさな 昨日はうすきよものもみぢば

##### 2) 高尾 (たかお) 高倉院御歌

うす霧の立まふ山の紅葉ばハ さやかならねとそれと見へけり

\*新古今和歌集 (大観 I -p.226、新大系 524) 高倉院御歌

薄霧のたちまふ山のもみぢ葉は さやかならねどそれと見えけり

##### 3) 八染 (やしお)

あきすゑ

浅からぬ八鹽の岡の紅葉はを なにあやにくに時雨そむらん

\*夫木和歌抄 (大観 II -p.666) 修理大夫顕季卿

あさからぬやしほのをかのもみぢばを なにあかなくにしぐれそむらん

## 4) 笠取山 (かさとりやま)

雨ふれハ笠とり山の紅葉ハ 行かふ人の袖さへそてる 忠 峯

\* 古今和歌集 (大観 I -p.15、新大系 263) 忠岑 (ハは原本では別の記号)

あめふればかさとり山のもみぢ葉は 行かふ人の袖さへぞ照る

## 5) 赤地錦 (あかちのにしき) 千載集 院御製

紅葉はに月の光をさしそへて 是や赤地の錦なるらん

\* 千載和歌集 (大観 I -p.192、新大系 360) 院御製 (院=後白河院)

もみぢ葉に月のひかりをさしそえて これや赤地のにしきなるらむ

## 6) たむけ山

菅 家

此度はぬさもとりあへずたむけ山 紅葉のにしき神のまに／＼

\* 古今和歌集 (大観 I -p.19、新大系 420) 菅原朝臣

このたびは幣もとりあえずたむけ山 紅葉の錦神のまに／＼

## 7) 名月 (めいげつ) 一名いたや楓 古今

秋の月山へさやかにてらせるハ 落る紅葉の數を見よとか

\* 古今和歌集 (大観 I -p.16、新大系 289)

秋の月山辺さやかに照らせるは 落つるもみぢの數を見よとか

## 8) しめの内 (しめのうち)

周防内侍

木枯も心して吹ケしめのうちハ ちらぬ紅葉は大原の山

\* 続拾遺和歌集 (大観 I -p.387) 周防内侍

木がらしも心してふけしめの中は ちらぬ梢ぞおほ原の山

## 9) ときわ

紀よしも地

もみぢせぬときわの山ハ吹風の 音にや秋をきハわたるらん

\* 古今和歌集 (大観 I -p.15、新大系 251) 紀 淑望

もみぢせぬときはの山は吹風の をとにや秋をききわたる覽

## 10) 切錦 (きれにしき)

たハミネ

神なひのみむろの山を秋ゆけは 錦立切心地こそすれ

\* 古今和歌集 (大観 I -p.16、新大系 296) 忠岑

神なびの三室の山を秋ゆけば 錦たちきる心ちこそすれ

## 11) 青葉 (あおば)

為相卿

如何にして此一本のしくれけん 山にさきたつ庭の紅葉は

\* 法印堯慧「北国紀行」(新大系:『中世日記紀行集』)

いかにして此一本に時雨れけん 山に先立つ庭のもみぢ葉

(この歌は堯慧法師の紀行文中に為相卿の歌として載っており、そのことは『鎌倉志』に述べられていると、父伊兵衛の『花壇地錦抄』中にある。)

## 12) かぎり 古今

よミ人しらす

- ちらねともかねてそおしき紅葉はハ 今をかきりの色とみつれば  
 \*古今和歌集（大観 I -p.15、新大系 264）よみ人しらず  
 散らねどもかねてぞおしきもみち葉は 今は限の色と見つれば
- 13) 紅の波（もみのなみ） そせい  
 紅葉のながれてとまるみななどには くないふかき波や立たむ  
 \*古今和歌集（大観 I -p.16、新大系 293）素性  
 もみち葉のながれてとまるみななどには 紅深き浪やたつらむ
- 14) 紋錦（もんにしき） をきよし  
 霜のたて露のぬきこそよハからめ 山の錦のをればなりけり  
 \*古今和歌集（大観 I -p.16、新大系 291）関雄  
 （「をきよし」は「せきお」の誤写であろう）  
 霜のたて露のぬきこそよはからし 山の錦のをればかつちる
- 15) さを山 きのともりの  
 たかための錦なればか朝霧の さほの山邊を立かくすらん  
 \*古今和歌集（大観 I -p.15、新大系 265）紀 友則  
 誰がための錦なればか秋ぎりの さほの山べをたちかくすらむ
- 16) 袖の内（そでのうち） 素性法師  
 紅葉はは袖にこき入てもていてなん 秋はかきると見ん人のため  
 \*古今和歌集（大観 I -p.16、新大系 309）素性法師  
 もみち葉は袖にこきいれて持ていでなむ 秋は限と見む人のため
- 17) 鹿紅葉（しかもみち） 猿丸大夫  
 おく山に紅葉ふみわけなく鹿の こゑ聞時そ秋はかなしき  
 \*古今和歌集（大観 I -p.14、新大系 215）よみ人しらず  
 （小倉百人一首では猿丸大夫）  
 奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿の こゑきく時ぞ秋はかなしき
- 18) 業平（なりひら） 古今 よみ人しらす  
 こひしくは見てもしのはん紅葉はを 吹なちらしそ山嵐の風  
 \*古今和歌集（大観 I -p.16、新大系 285）  
 恋しくは見てもしのぼむもみちばを 吹きなちらしそ山おろしの風
- 19) かよい きのともりの  
 紅の色には出しかくれぬの したにかよひてこひはしぬとも  
 \*古今和歌集（大観 I -p.23、新大系 661）紀 友則  
 紅の色には出でじ隠れ沼の したにかよひて恋ひは死ぬとも
- 20) 朝露（あさつゆ） としゆき朝臣  
 白露の色はひとつをいかにして 秋の木の葉をちゞにそむらん

\*古今和歌集（大観 I -p.15、新大系 257）敏行朝臣

白露の色はひとつをいかにして 秋の木のはをちゞに染む覧

21) 奥羽獨揺（おうしうしだれ）

河原左大臣

みちのくのしのふもちすりたれゆへに ミだれ染にし我ならなくに

\*古今和歌集（大観 I -p.24、新大系 724）河原左大臣（小倉百人一首は上記の形）

陸奥のしのぶもちずり誰ゆへに みだれむと思我ならなくに

22) しがらみ

はるミちのつらき

山川に風のかけたるしからミは なかれもあへぬ紅葉なりけり

\*古今和歌集（大観 I -p.16、新大系 303）春道列樹

山河に風のかけたるしがらみは ながれもあへぬもみちなりけり

23) しぐれ山

よミ人しらす

龍田川錦おりかく神無月 時雨のあめをたてぬきにして

\*古今和歌集（大観 I -p.16、新大系 314）よみ人しらす

龍田河錦をりかく神無月 しぐれの雨をたてぬきにして

24) 九重（このえ）

藤原公重朝臣

庭の面にちりてつもれる紅葉はは 九重にして錦なりけり

\*千載和歌集（大観 I -p.193、新大系 369）藤原公重朝臣

庭のおもにちりてつもれるもみち葉は 九重にしくにしきなりけり

25) 武蔵野（むさしの）

よミ人しらす

しらねとも武蔵野といへばかこたれぬ よしやさこそは紫のゆへ

\*古今和歌六帖（大観 II -p.241）

しらねどもむさしのといへばかこたれぬ よしやさこそはむらさきのゆゑ

26) 嵐山（あらしやま）

能因法師

あらし吹みむろの山の紅葉ばは 立田の川の錦なりけり

\*後拾遺和歌集（大観 I -p.117、新大系 366）能因法師

あらし吹くみ室の山の紅葉ばは 竜田の川の錦なりけり

27) 立田（たつた）

心から紅葉ハすらん立田山 松は時雨にぬれぬものかハ

藤原輔尹

\*新古今和歌集（大観 I -p.227、新大系 527）皇太后宮大夫俊成。（藤原輔尹は次につづく、528の歌の作者藤原輔尹朝臣を誤写したものであろう。）

心とやもみちはすらん立田山 松はしぐれにぬれぬものかは

28) 侘人（わびびと）

僧正遍昭

わひ人のわきて立よる木の下は たのむかけなく紅葉ちりけり

\*古今和歌集（大観 I -p.16、新大系 292）僧正遍昭

わび人の分きてたちよる木のもとは たのむかげなくもみちちりけり

## 29) 待風(まつかぜ)

友則

心から春待そのは我宿の 紅葉を風のついでにたに見よ

\*紫式部「源氏物語」(新大系『源氏物語』「少女」)(友則は誤記であろう)

心から春まつそのはわがやどの 紅葉を風のついでにだに見よ

## 30) 白波(しらなみ)

よミ人しらず

紅葉の流てとまる網代にハ しらなミも又よらぬ日そなし

\*古今和歌六帖(大観Ⅱ-p.216)つらゆき

もみぢばのながれてとまるあじろには しらなみもまたよらぬ日ぞなき

## 31) 深山楓(みやまかいで)

貫之

見る人もなくて散ぬる奥山の 紅葉ハ夜の錦なりけり

\*古今和歌集(大観Ⅰ-p.16、新大系 297)貫之

見る人もなくてちりぬる奥山の もみぢは夜の錦なりけり

## 32) 通天(つうてん)

古今

よミ人しらず

たちとまり見てを渡らん紅葉はハ 雨とふるとも水はまさらし

\*古今和歌集(大観Ⅰ-p.16、新大系 305)

立とまり見てをわたらむもみぢ葉は 雨と降るとも水はまさらし

## 33) 飛鳥川(あすかかわ)

人麿

飛鳥川紅葉ばなかるかつらきの 山の秋風吹そしぬらし

\*新古今和歌集(大観Ⅰ-p.227、新大系 541)柿本人麿

飛鳥河もみぢ葉ながるかづらきの 山の秋風ふきぞしくらし

## 34) 村雲(むらくも)

覺延法師

村雲のしくれて染る紅葉はハ うすくこくこそいろも見にけり

\*千載和歌集(大観Ⅰ-p.192、新大系 354)覺延法師

むら雲のしぐれてそむるもみぢ葉はうすくこくこそ色もみえけれ

## 35) 唐錦(とうきん)

為氏

時雨もておるてふ秋の唐錦(からにしき) たちかさなれる衣手の森

\*玉葉和歌集(大観Ⅰ-p.437)前大納言為氏

しぐれもておるてふ秋のからにしき たちかさねたるころもでのもり

## 36) うらべに

貫之

しら露も時雨もいたくもる山は 下葉のこらず紅葉しにけり

\*古今和歌集(大観Ⅰ-p.15、新大系 260)貫之

しらつゆも時雨もいたくもる山は 下ばのこらず色づきにけり

## 資料Ⅱ

後出歌仙もみち集（新歌僊楓集）

## 1) 千染（ちしほ）

藤伊經朝臣

ちしほまでいつの人まにそめつらん めかれぬ庭の秋のもみち葉

\*藤葉和歌集（大観Ⅵ-p.316）藤原伊俊朝臣（藤伊經朝臣は藤原伊俊朝臣の誤写であろう）

## 2) もみちかさね

俊成

山姫の岩かきかくれたかるらん もみちかさねの袖の見へつる

\*題林愚抄（大観Ⅵ-p.515）俊成

## 3) 關守（せきもり）

前大納言隆房

あふ坂のせきの紅葉のからにしき ちらねば袖にかさねましくや

\*続千載和歌集（大観Ⅰ-p.493）前大納言隆房

## 4) ます紫（ますむらさき）

欣子内親王

日にそへて色こそまされきのふより けふはしくるゝ峯のもみちは

\*新後拾遺和歌集（大観Ⅰ-p.699）欣子内親王

## 5) 遠近人（おちこちひと）

大納言實雅

たまほこの道行人の袖の色も うつるはかりにそむるもみちは

\*続後撰和歌集（大観Ⅰ-p.296）権大納言實雄（大納言實雅は権大納言實雄の誤写であろう）

## 6) 小夜時雨（さよしぐれ）

衣笠前内大臣

此のさとはいつしくれけむをくら山 ほかにいろみぬ峯の紅葉は

\*続古今和歌集（大観Ⅰ-p.328）衣笠前内大臣

## 7) ひとしほ

左大臣

そめまさる色こそ見ゆれはゝそ原 けさの時雨のあとのひとしほ

\*藤葉和歌集（大観Ⅵ-p.316）左のおほいまうち君（=左大臣）

## 8) 松かえ

藤朝臣

色かへぬ松ふく風のおとハして ちるははゝそのもみちなりけり

\*千載和歌集（大観Ⅰ-p.193、新大系 375）藤原朝仲（藤朝臣は藤原朝仲の誤写であろう）

## 9) 神無月（かみなつき）

殷富門院大輔

神無月しくれの雨のをりかけし にしき吹をろすさほの山かぜ

\*新拾遺和歌集（大観Ⅰ-p.684）殷富門院大輔

## 10) とやま

永福門院

そめはてぬと山の秋のうすもみち しくれてもなをのこす一しほ

\*題林愚抄（大観VI-p.516）永福門院

11) 隣家（りんか） 資平卿

あしかきのへたてなからもへたてぬハ よもの紅葉のこすゑなりけり

\*題林愚抄（大観VI-p.515）資平卿

12) 敷嶋（しきしま） 為家

しきしまややまとにハあらぬくれなゐの 色の千染にそむるもみちは

\*新拾遺和歌集（大観I-p.661）前大納言為家

13) 花のゑん 定家

うつろひし昔の花の都にて のこる錦の色ぞしくるゝ

\*拾遺愚草（大観III-p.821）（「拾遺愚草」は定家の私家集）

14) 古郷（ふるさと） 前中納言實任

いづくをかわがふるさとゝもみちはの 錦たちきて秋のゆくらん

\*藤葉和歌集（大観VI-p.316）前中納言實任

15) 初もみぢ（はつもみぢ） 近衛前關白左大臣

花ならはうつろふ色やをしからむ ちしほをいそく秋のもみちは

\*新拾遺和歌集（大観I-p.661）前關白左大臣近衛

16) 夕暮（ゆふくれ） 二品法覺助

夕日かげさすやたかねのもみちはハ そらにちしほのいろそうつろふ

\*新拾遺和歌集（大観I-p.661）二品法親王覺助

17) 紋盡（もんづくし） 俊光卿

山姫もわきてやそむるうすくこく 木々にかはれる峰のもみち葉

\*題林愚抄（大観VI-p.514）俊光卿（々は原本では別の記号）

18) 夕時雨（ゆふしぐれ） 公雄

もみち葉によその日影ハのこれとも しぐれてくるゝ秋のやま哉

\*続拾遺和歌集（大観I-p.364）權中納言公雄

19) 鬱金（うこん） 為家

くちなしの一しほそめのうすもみち いはてのやまのさそしくらん

\*続古今和歌集（大観I-p.328）前大納言為家

20) 水かゞ見 龜山院

紅葉はの下行水にかけミへて ちらぬ梢そ根にかへりぬる

\*新千載和歌集（大観I-p.612）龜山院御製

21) をくしも 前大僧正慈圓

もみちはをおのが染たる色ぞかし よそげにをける今朝の霜かな

\*拾玉集（大観III-p.679）（「拾玉集」は慈圓の私家集）

22) わすれかたミ 家隆朝臣



- 露しくれもる山かけの下紅葉 ぬるともおらん秋のかたミに  
 \*新古今和歌集（大観 I -p.227、新大系 573）家隆朝臣
- 23) しぐれそめ 為忠卿  
 うすくこくかはる紅葉の梢かな 時雨の色の定めなけれハ  
 \*題林愚抄（大観VI-p.515）為忠卿
- 24) 千里（ちさと） 前中納言定家  
 山もとのみちのあるしうとけれと しぐれも露も色はミへけり  
 \*続後撰和歌集（大観 I -p.297）前中納言定家
- 25) 駒駐（こまとゞめ） 古今 よみ人しらす  
 立田川もみちミたれてなかるめり わたらはにしき中やたへなむ  
 \*古今和歌集（大観 I -p.16、新大系 283）よみ人しらす
- 26) 綾蘭笠（あやみかさ） 藤伊家  
 見むろ山紅葉ちりしくたび人の すげのをかさになしきをりかく  
 \*金葉集（大観 I -p.146、新大系 263）大納言経信（藤伊家は大納言経信の誤記であらう）
- 27) しのぶ 七條院大納言  
 初しぐれしのぶの山のもみち葉を あらしふけとハそめすや有けむ  
 \*新古今和歌集（大観 I -p.227、新大系 562）七條院大納言
- 28) 名取川（なとりかわ） 源 重之  
 名とり川やなせの波もさハなり もみちやいとよりてせく羅ん  
 \*新古今和歌集（大観 I -p.227、新大系 553）源 重之
- 29) 秋風 權大夫公繼  
 紅葉はの色にまかせてときわ木も 風にうつろふ秋の山かな  
 \*新古今和歌集（大観 I -p.227、新大系 536）春宮大夫公繼
- 30) 内ゆかし 土御門院  
 おく山にちしほの紅葉色ぞこき 都のしぐれいかそむらむ  
 \*題林愚抄（大観VI-p.514）土御門院
- 31) 幾染（いくしほ） 為明卿  
 いくしほぞ露も時雨もくれな井の 色こきまてと染るもみち葉  
 \*題林愚抄（大観VI-p.514）為明卿
- 32) うづらの羽（は） 前参議親隆  
 鶉なくかた野にたてるうすもみち ちらぬはかりに秋風そふく  
 \*新古今和歌集（大観 I -p.227、新大系 539）前参議親隆
- 33) 小雨（こさめ）の錦 梶井宮  
 色かはる山濃時雨のかきくもり ふるにもてるハ紅葉なりけり

\*題林愚抄（大観VI-p.514）梶井宮

34) 七夕（たなはた） 安嘉門院四條

またれつる天の河原に秋立て もみちをわたる波のうきはし

\*玉葉和歌集（大観I-p.430）安嘉門院四條

35) 手染糸（てそめのいと） 隆祐

くれなゐのこそめの糸の村時雨 山のにしきををらぬ日そなき

\*題林愚抄（大観VI-p.516）隆祐

36) 鹿毛織錦（かけおりにしき） 大納言基家卿

をのがすむ峯のこがらしさむき夜は 鹿も紅葉の衣きるらし

\*夫木和歌抄（大観II-p.573）後九条内大臣（大納言基家卿と後九条内大臣は同一人物）

資料III

楓二十八種（追加楓集）

1) 唐楓

和歌なし。

2) 漣波（ささなみ） 後西院

ささなみやよるさへ見よともみちはの うつるもてらす池の月かけ

\*新題林和歌集（集成II-p.366）後西院

3) 初花（はつはな） 後宇多院

くれないのちしほのもみちそめすてて 雲のいづくにしくれゆくらむ

\*新千載和歌集（大観I-p.612）後宇多院御製

4) 道しるべ 御製

はるかなるみねのもみちのかくれねば たつぬる道もまよはさりけり

\*龜山殿七百首（大観X-p.463）御製

5) 御所染（ごしょそめ） 後水尾院

いつしかとけふはもみちの秋はきぬ みしはきのふのはなのみやこに

\*後水尾院集（大観IX-p.169）

6) 葛城（かつらぎ） 後陽成院

もみちするとよらの寺は入りあひの こえも色あるかつらきのやま

\*新題林和歌集（集成II-p.387）後陽成院

7) 浅茅（あさぢ） 仙洞

露見えてなびく浅ぢの末葉より まつ色かはる秋のはつかせ

\*新題林和歌集（集成II-p.337）仙洞（=靈元院）

8) 若紫（わかむらさき） 為綱

今よりは心もそめむうすもみち まつ色見する秋のこすゑに

\*新後明題和歌集（集成Ⅱ-p.192）為綱

9) 唐織（からおり） 国久

そめ／＼て見るにそあかぬ唐錦 名にも立田のみねのもみちは

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.385）国久

10) 待宵（まつよい） 有藤

今もなをしくれに染て小くら山 みねのもみちはみゆきをやまつ

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.386）有藤

11) 夕霧（ゆふきり） 通清

くるゝかで見し山もとは霧はれて もみちにてらす遠の一むら

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.387）通清

12) 釣錦（つりにしき） 通茂

紅にすゝく錦もしかじ日にさらし 時雨にあらふ山のもみちは

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.388）通茂（初句の「紅」は「江くえ」の誤写であろう）

13) 呉服（くれは） 雅喬

たてぬきにおくや露しもから錦 をるも色こき衣手の杜

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.386）雅喬

14) 柞（ははそ） 実陰

山ふかきちしほの木々にましりては うすきはゝその色もめすらし

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.384）実陰、芳雲集（大観Ⅸ-p.291）

15) 扇子流（あふぎながし） 家経

たかせ舟しふくはかりも紅葉々の ながれてくたる大井川かな

\*新古今和歌集（大観Ⅰ-p.227、新大系 556）藤原家経朝臣

16) 麓寺（ふもとてら） 後成

尋ね入ふもとのさとの紅葉々に これよりふかきおくそしらるゝ

\*題林愚抄（大観Ⅵ-p.515）俊成（後成は俊成の誤写であろう）

17) 十寸鏡（ますかがみ） 素然

をり／＼の心うつしてなかむるや かはる気色のもりの春秋

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.505）素然、通勝集（大観Ⅷ-p.803）（歌の最後の文字は我々のテキストでは特別な文字を用い「葉カ」とルビをふっているが、集成でも大観でも秋となっているので、印刷上の問題もあり、秋とした。）

18) 真間（まま） 通村

花もみちわくは心の色香にて なにかは法のほかのものなる

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.562）通村、後十輪院内府集（大観Ⅸ-p.114）

19) 七瀬川（ななせかわ） 通躬

秋ふかきこの川きしに影見へて 色のふちせくえたのもみちは

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.387）通躬

20) 朽葉（くちば）

重条

しくれては猶いかならん露にけさ ひとしほ染もあかぬもみちは

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.384）重條

21) 品川（しながわ）

時方

露時雨わきてやそめしこきはこく うすきはうすき木々のもみちは

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.384）時方

22) 黄八丈（きはちでう）

基熙

木々はまだ一夜の露のした染に こゝろにそめてみるそ色こき

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.385）基熙

23) 清滝（きよたき）

稱直

こゝろしてふくやあらしの音羽川 もみちせき入ておとす滝つせ

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.396）雅直（稱直は雅直の誤写であろう）

24) 蔦の葉（つたのは）

実種

ゆめにてもみせはや人にうつ山 秋のもみちの蔦の下みち

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.384）實種

25) 水潜（みずくぐり）

義延

行水になかれもやらぬ紅葉々や ちらぬこすゑをうつす山川

\*新後明題和歌集（集成Ⅱ-p.192）義延

26) 金欄（きんらん）

資慶

露しくれ色そめつくす紅葉々に 光をそふる夕つく日かな

\*新後明題和歌集（集成Ⅱ-p.192）資慶

27) 松影（まつかげ）

実岑

おくふかく入もてゆけば松杉の なかに色こき峯のもみちは

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.386）實岑

28) 軒端（のきば）

定基

はふ蔦そあれ間をかこふ板ひさし 紅葉をふける軒と見るまで

\*新題林和歌集（集成Ⅱ-p.384）定基